



**ガンバ大阪
宮本恒靖 監督**

1977年生まれ。同志社大学卒。95年、ガンバ大阪入団。2007年、オーストリア・ザルツブルクへ移籍。09年、ウィッセル神戸へ移籍。11年、現役引退。日本代表国際Aマッチ71試合出場(3得点)。02年・06年、FIFAワールドカップ出場。12年、FIFAマスターに進学、13年修了。17年、ガンバ大阪U-23監督、18年7月、同トップチーム監督に就任。

宮本 マリモストも、選手育成ではなく、この国の未来を創ることを感じました。

と言葉が通じないのにすぐに打ち解けることができた。あれがスポーツの力を感じた最初の体験だったと思います。

鈴木 「読み書きそろばん」だけでは、協調性や対話能力は身に付きません。こうした「非認知能力」と言われる、人として成長するうえで重要な「生きる力」は、スポーツを通じて身に付きます。

宮本 それは確かにスポーツでは必要な能力ですが、社会生活にも役立つというのは面白い発想ですね。

鈴木 何かをしようとするとき、周りを巻き込む力が必要ですからね。同じスポーツでもサッカーだったということも大きいと思います。サッカーはボールさ

えあれば誰でも参加できますから。青年海外協力隊はいろんな競技を教えにいていますが、例えば野球だとまず用具を揃えるのが大変なんです。

世界に出る若者が未来を創る

鈴木 最近の日本の若い世代は、海外にあまり出なくなってきたと言われています。でも、今後は国内の外国人労働者も増えてきますし、青年海外協力隊のように、違う文化の人たちと交渉し、理解し合える人材が今以上に必要になってきます。

宮本 サッカーも海外へ出ると、いろんなサッカーがあることがわかります。アフ



**国際協力機構
鈴木規子 理事**

1981年に上智大学文学部卒業後JICAに入団。各部署にて主に社会開発分野の業務を担当。日本政府国連代表部一等書記官、企画・評価部環境・女性課長、理事長室秘書役、企画・調整部企画グループ長、JICAスリランカ事務所長、JICAマレーシア事務所長、広報室長、国際緊急援助隊事務局長を歴任。2016年から現職。

リカのサッカーを経験すると、こんなに自由奔放なサッカーがあるんだと驚かされます。現地へ行くと、そういうサッカーになった背景が肌感覚でわかるんですね。

鈴木 目から鱗ですよ。本で学ぶのと、実際にその国へ行ってみるとは全然違う。自分と違うことを許容する能力は、「目から鱗」の中へ入っていかないと育たないと思うんです。日本はビジネスで行ける国が世界で一番多いので、若いうちから世界へ出ることは大事ですね。僕がFIFAマスターに通っているとき、9歳の息子をスイスのプリティッシュ・スクールに入れたんです。向こうの授業は常に先生も生徒も言葉が発して、日本とスタイルが違う。そんなふうには、日本のスタンダードが世界のスタンダードではないことを知るためには、海外を経験したほうがいい。その大切さは息子にも、チームの若い選手たちにも伝えていきます。

鈴木 ここ数年、JICAでは多民族国家・南スーダンの「全国スポーツ大会(国民結束の日)」開催を支援しています。対立している民族同士の試合はケンカになるかと心配していたら、試合後、互いに健闘を称えあっていました。スポーツを通じてフェア精神を学んだ若者たちが、その国の未来を創ることを感じました。

あくまで地域の人材育成が目的です。民族融和を推し進められるような人材が育ってきたら、ひとまず成功と言えるのではないのでしょうか。次は、このスキームが他の紛争地域にも適用できるかどうかを検証していきたいですね。

鈴木 宮本さんの活動は、解決の糸口が見えない様々な紛争国の最初の一步になると思いますよ。青年海外協力隊員の間にも何かできるんじゃないかと思う人がたくさんいるはずですよ。隊員は帰国後、企業に入ったり、NGOを立ち上げたり、地域おこしに関わったりする人もいます。言葉の通じない外国で、いろんな人を巻き込みながら活動してきた隊員は、異なる文化への適応能力やコミュニケーション能力を身に付けていますから、これからの日本の国際化、多文化共生に貢献できる人材と言えます。そうした隊員の社会還元を、我々も応援していきたいと思っています。宮本監督も応援をお願いいたします！



スポーツの力で国際協力を!
宮本恒靖氏が目指すものと「JICA海外協力隊」の可能性

紛争の傷跡が残るボスニア・ヘルツェゴビナで、スポーツアカデミーを設立した宮本恒靖さん(Jリーグ・ガンバ大阪監督)と、世界各国で青年海外協力隊等の活動を通じて、スポーツによる開発を行う国際協力機構(JICA)の鈴木規子理事。スポーツの力で国際協力を目指すうえで大切なことは何か、その先にあるものは何か。大いに語り合った。

文/中村 計 写真/増尾 峰明 デザイン/洞口 誠(ドットワークス) 企画・制作/AERA AD セクション

スポーツによる平和への貢献

鈴木 JICAはこれまでに5万人を超える「海外協力隊」を派遣し、体育・スポーツ分野の隊員は競技の指導や人材育成、スポーツを通じた平和促進などを行ってきました。宮本さんは世界の社会情勢に強い関心を持たれ、ボスニアの民族融和を促すためにサッカーアカデミー「マリモスト」の設立に尽力するなど、積極的に行動されていますね。それは何かきっかけがあったのでしょうか。

宮本 17歳のときにフランスやイギリスに遠征した経験があり、早い時期に海外への関心をもてたことが大きかったです。ですが、決定的だったのは、現役引退後にFIFAマスターに進学したことでしょ。そこで修士論文にあたるグループワークで「ボスニア・ヘルツェゴビナの民族融和と多文化共存」というテーマを研究しました。その経緯が新聞に掲載され、外務省やJICAの人から協力したいという話があったんです。

鈴木 多民族国家のボスニアは1992年から95年の内戦で多くの難民を出し、現在も対立感情は消えていない。そういったことは我々が説明するより、宮本さんのような立場から発信してもらえるとすごく身近に感じてもらえるですよ。

宮本 ただ、我々は当初、思い入れが強すぎて前のめり気味だったのですが、JICAの人たちに俯瞰的に見てもらい、冷静な判断ができたことがたくさん

ありました。最終的には現地の人に運営してもらわないと持続していかない。そのためには、どこにどんな種を蒔けばいいのかといったことです。

鈴木 持続性というのは、国際協力をするうえで最も重視するところですよ。実はJICAでも同時期に、IT教育を通じて民族融和を図ろうというプロジェクトが進行していました。ボスニアは内戦後、民族ごとに違うカリキュラムで学習していた。それでは、いつまでたっても国の一体感が出てきません。

宮本 現地の親たちは、子どもたちに対して感情を引き継いでほしくないと思っている。そのために、子どもたちが自然と交流し、仲間意識を育める場が必要でした。18歳でイギリスに行ったとき、公園で子どもたちがボールを蹴っていたので交ぜてもらったことがあるんです。する



2017年夏にはマリモストに通う子どもたちをボスニア・ヘルツェゴビナのモスタル市から日本へ招待し、ガンバ大阪アカデミーの子どもたちと交流を図った ©Little Bridge Japan

JICA海外協力隊とは

- 開発途上国からの要請に基づき、青年海外協力隊等として派遣され、現地の人のひとと共に取り組んでいます。任期は原則2年間で、これまで世界91か国に5万人以上の隊員を幅広い分野に派遣してきました。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を活かした活躍が期待されています。現在、2019年度春募集受付中。
- ※4月3日(水)まで。